



江戸時代の長良川水運①



江戸時代になると、各地で城下町や門前町・宿場町などの建設が盛んに行われました。そのために必要な大量の材木が、筏に組むなどして流送されました。また、幕府・大名の御用物資・年貢米などの輸送のほか各地の商品生産と流通が発展し、荷舟による舟運の役割も一層拡大しました。長良川流域でも各地に川湊ができ、風で帆を膨らませた大小の舟が、頻りに長良川を往來していたのです。

1. 長良川の材木流送

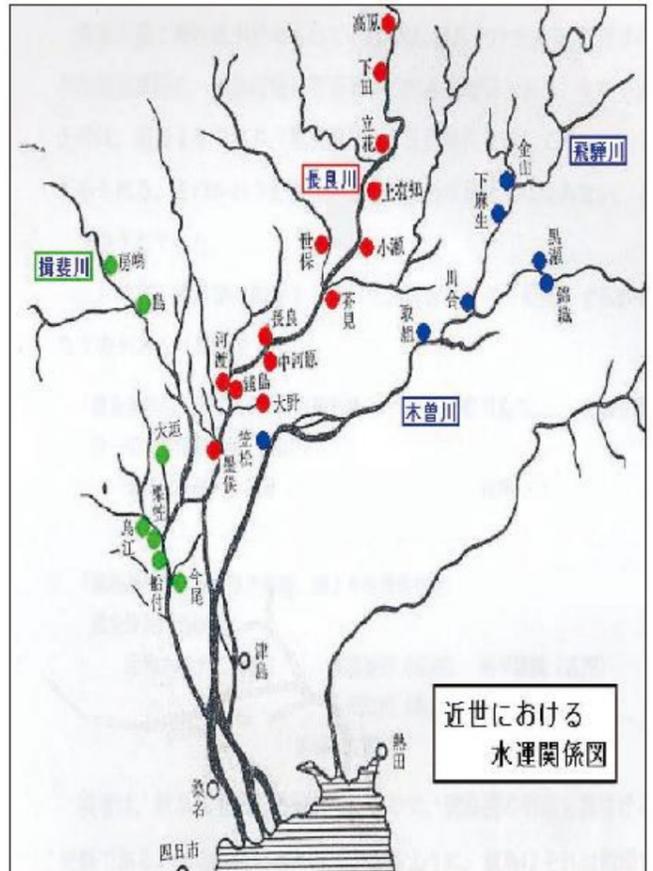
(筏流し)
郡上郡内の材木流送は、郡上藩主・遠藤常友の時代(1646〜1676)に始まりました。新田開発を進めて検地を実施すると共に、材木を伐り出し、藩財政の立て直しを図ったのです。そのため領民が山林に立ち入ることを禁じ、藩が独占的に材木を伐採・販売する体制を築きました。

藩内で伐り出された材木は御用材として刻印が打たれ、長良川を流送して市場に送られました。川筋の高原村(現・郡上美並町高砂)などの農民は「筏株」を与えられ、筏の流送に携



高原の筏場・大正元年

わるようになりまし。郡内においては、筏を組み立てるところと筏を流送することは別の仕事とされ、分業体制が確立されました。



な下田(現・郡上美並町上田)・須原(現・美濃市須原)・立花(現・美濃市立花)・上有知(現・美濃市上有知)・小瀬(現・関市小瀬)・芥見(現・岐阜市芥見)・長良(現岐阜市長良)・岐阜中河原(現・岐阜市川原町)・河渡(現・岐阜市河渡)・墨俣(現・大垣市墨俣)等でした。

「郡上川筋」と呼ばれていました。そして金華山麓より下流は、「長良川筋」(墨俣川筋・河渡川筋)と呼び分けられ、墨俣や桑名・名古屋、更に江戸や大阪へと通じていたのです。江戸時代に岐阜市域から河口まで下るのにどのくらいの時間がかかったかは、当時の旅日記などから知ることができません。下りの場合はおむね就寝時間ころに乗船すれば明け方には河口に着きました。悪天候でも、朝に中河原で乗船して、桑名に真夜中過ぎに着いています。上りの場合は、昼頃に津島(愛知県)付近から乗船し、夜10時頃に小瀬(羽島市)に帰っている記



山から伐り出された材木は、川(流量や水深など)が大きくなる地点まで「管流くだり」といって一本ずつ流送しました。そして、長良川と吉田川の合流点である中野村(現・郡上八幡町稲成)で、小型の筏(幅約2m、長さ4m)にして高原村まで流送。また中野村から高原村の間で伐り出した材木については、「ひろい筏」(材木2〜3本の筏)にしました。そして水量が豊富になる高原村では、上流から送られて来た筏を3枚繋ぎ合わせて、高原村の筏乗りによって武儀郡立花村(現・美濃市立花)まで流送しました。立花村では、郡上方面

から流送されてきた筏(小)を(大)に組み直して、さらに下流へ流送したのです。美濃国の中心地・岐阜町の入口である中河原(現・岐阜市川原町)では、筏乗り手と言われる人たちによって、上流から流送されて来た小さな筏がさらに大きな筏に組み直されました。そして2人の筏乗り手によって、津島・桑名・白鳥(名古屋)方面にまで流送されていきました。

3. 長良川水運の要

(中河原湊の長良川役所)
長良川を下る筏と、上流から下流に送られる舟荷(年貢米などを積んだ幕府・大名の御用舟を除く)を把握し、そこから一定の役銀(税金)を徴収する役所が長良川役所でした。

その成立年代は不明ですが、元和5(1619)年岐阜町(中河原も含む)が尾張藩に編入され、役銀を徴収する長良川役所も尾張藩が引き継ぐことになりました。これは、長良川水系の水運の支配権が幕府(美濃国代官)から尾張藩に移り、尾張藩の長良川役所、つまり岐阜町の中河原湊が長良川水運の要となったことを意味しています。長良川役所は、川を下る材木、竹、酒、紙、茶、薪炭などの舟荷と舟数をチェックして、税金を徴収しました。上流地域の特産物が川を運ばれたことが分かります。また商人が材木を購入して岐阜町へ揚げる場合は、通行税とは別に筏役を徴収しました。川役所には尾張藩の国奉行手代・代官手代が常駐しましたが、全ての実務を担ったのは付問屋(改役)でした。江戸時代を通じて付問屋(改役)を務めたのは中河原に住む西川家で、17世紀後半からは対岸の長良の住民も



川役所・付問屋跡

加わりました。また上流から筏に組んで流されてきた材木を中河原で組み直して桑名や名古屋方面に送る筏乗り手(46人)や、岐阜町への物資の陸揚げと運送を独占的に行う小揚げ人(40人)も交代で役所に詰めて仕事を補助しました。西川家はこの筏乗り手・小揚げ人も管理しており、材木などの輸送問屋でもありました。中河原が独立し発展することができたのは、この長良川役所の設置が契機となつて筏乗り・小揚げ人・船乗りなど水運に従事する者が住み着くようになったからです。(つづ)

○この文章は、『岐阜市史・通史編・近世』や『長良川水系の河川水運』等をもとに、後藤征夫がまとめました。